

松下幸之助記念志財団 研究助成
研究報告

(MS Word)

【氏名】 高木眞澄

【所属】 (助成決定時) 一橋大学社会学研究科博士後期課程

【研究題目】 19世紀後半アメリカ合衆国における職工技能と心性の結合に関する社会史的考察：黒人大工についての考証を通して

【研究の目的】 (400字程度)

本研究は、アメリカ合衆国における住宅生産システムに要請される合理化された大工技能と職人精神の関係性の成立について研究するものである。

問題意識として、1970年代の日本に導入され住宅産業化の実質的トリガーとなった「ツーバイフォー工法(枠組壁構法)」の技術導入に伴って生じた大工技能の再定義を念頭においている。日本に導入されたアメリカ式の合理的な住宅生産システムにおいて、現場における最終的なアセンブリの担い手に求められたのは、新たな熟練技能と責任を持って仕事をやり遂げるクラフトマンシップであった。庶民向けの安価な住宅の必要という社会的要請に応え、現在の日本で住宅生産を実際に担っている大工、またそのモデルになったアメリカにおける大工は、単純作業を行う肉体労働者と言う言葉で言い表せるものではないのである。アメリカ合衆国において産業化を経て大工技能が単純労働になったという理解について、再検討する必要がある。

【研究の内容・方法】 (800字程度)

本研究では、産業化以後の大工技能と心性の関係を再検討する方法として、現代社会が要請する安価で庶民向けの住宅生産システムとの歴史的つながりを念頭におき、大工技能や職人心性の更新を重視する。1920年代後半にジークムント・ギーディオンが公表したバルーンフレーミング再評価論以降、産業化に伴って再定義された大工技能はバルーン・フレーミングというノミやカンナ技能の使用頻度を減退させたフレーミング方式に象徴されるものであると考えられ、バルーン・フレーミング以降の大工技能は単純な肉体労働に置き換わる傾向にあったという理解が成立した。例えば歴史家ダニエル・ブーアスティンによるアメリカ史の通史の中では大工の産業化についてこの理解で書かれている。また全米大工造作工友愛組合に関する研究書は、産業化という新しい状況に直面して脅かされる大工の職域を一貫して擁護する大工のユニオニズムの指導者の姿を描いているが、新しく生じつつあった技能には関心を向けていない。つまり従来の理解において、産業化以後の大工は、職人存在の根拠を喪失したことになっている。

この時期のアメリカ中西部では、製材技術と輸送網の発展に伴ってランバー(規格製材)を利用する住宅のフレーミング方式が発展した。このような産業化に伴う変化に関連して生じた技能と職人意識の変化を明らかにするため、バルーン・フレーミングなどランバーを利用する大工技能に関係した教本等の中で考えられている職人像、加えて全米大工造作工友愛組合の機関誌 *The Carpenter* における新しい技能や大工のあり方を論じる記事を調査した。

またこの時期に再定義された大工の存在を庶民向けの量産住宅技術の歴史の中に明確に意味づけるために、20世紀半ばの戸建住宅ブームに見られた住宅生産の仕組み、さらには1970年代に日本に技術導入された「ツーバイフォー工法」に至る歴史的な連続について、主に二次文献を用いて調査した。

【結論・考察】 (400字程度)

産業化以後、住宅生産の担い手となった大工は、経験的技能とクラフトマンシップを有する職人としての側面を持っていた。効率的に住宅を量産する必要に応じた現場の担い手たちは、現代社会が要請する庶民向けの安価な住宅の生産システムに、職人存在の根拠を持っていった。

住宅建設における黒人の存在に関して、以下のような考察に至っている。調査記録によると南部の主要都市のほとんどで、黒人男性の職業訓練中および従事している技能職の第一位が大工であり第二位に鍛冶であった。技能を有する黒人は一定数いたとはいえ、東部や中西部都市ではわずかであったと考えられる。にもかかわらず *the Carpenter* 誌に掲載された記事の中には、奴隷と対比的に職人を位置付ける考え方が散見されることは、興味深い。より後の時期を分析するならば、住宅建設現場における黒人の存在がはっきりすると考えられる。例えば WWII 後のカリフォルニア州で住宅量産に従事した大工の回想の中に、もとシェアクロッパーの釘打ち名人への言及がある。